

虹を操る少年

東野圭吾

虹を操る少年

東野圭吾

実業之日本社

虹を操る少年

著者／東野圭吾

*

初版第1刷／1994年8月25日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替00110-6-326

郵便番号104 電話03(3562)2051〔編集〕(3535)4441〔販売〕

*

印刷所／大日本印刷

製本所／共文堂

*

©Keigo Higashino, Printed in Japan 1994

落丁、乱丁本は小社でお取りかえいたします

ISBN4-408-53235-5

虹を操る少年

装画／坂本 弘
装帧／坂川事務所

爆音が闇夜にこだました。数十個のヘッドライトが、先頭を頂点とする細長い二等辺三角形を形成したまま、幹線道路を東へ移動していた。四輪車はなく、すべてがバイクで、二人乗りをしている者もいなかった。全員が自分の力だけで走り、戦うのだというのが、このグループの主義だった。

バイクの塗装はすべて黒に統一されていた。それが強さを象徴する色だと彼等は信じていた。車体だけではない。彼等自身の姿もまた黒色だった。レザーのジャンパーなどではなく黒い戦闘服だ。ヘルメットもそれに合わせたものだった。

もう一つ特徴があった。それはヘッドライトの色だった。特殊な加工がなされており、一台一台、微妙に色が違うのだった。だから彼等が連なって走るのを遠くから見ると、まるで錦鯉が泳いでいるように見えることもあった。

今夜彼等は久しぶりに破壊活動を行ってきた。彼等がR地区と呼んでいる場所においてだった。

まずエリアに侵入して間もなく、地元の暴走族と鉢合わせした。典型的な旧タイプのグループで、無駄にエンジンをふかし、クラクションを鳴らし、大声で喚くことしか知らないような連中だった。戦うといえば、鉄パイプやチェーンを振り回すしか能がないのだ。

黒い一団の彼等は抜群のバイクテクニクを駆使して相手の原始的な攻撃パターンをかわすと、頃合を見計らって爆弾を一つだけ投げつけた。といっても彼等が所持する爆発物の中では最

も小さなものだった。それでもそれが炸裂した途端、相手のグループはサバンナでライオンに出くわした鹿のように逃げ出した。

黒い一団はしばらくその付近を走り回った後、自分たちのテリトリーに戻ってきたのだった。相馬功一はグループの中程を走っていた。彼等は一見好きなように走っているようで、じつは各自にポジションが与えられているのだった。

功一がこの仲間に加わったのは一年前だった。高校を中退したが何もすることがなく、毎日一人で走り回っているところを勧誘されたのだ。

「俺たちはただの族とは違う」黒い髪を兜のようにべったりとオールバックに固めたリーダーは低い声で功一にいった。「族は中年女みたいにヒステリーを起こしてやがるだけだ。それを青春だとほざく奴までいる。青春。せいしゅん。なんだ、その言葉は。ヘドが出る」リーダーは唾を吐いて続けた。「俺たちは闇を支配する。管理するといつてもいい。夜は俺たちのものだ。だから黒い服を着る。黒いバイクに乗る。俺たちは何色にも染まらない。おしつけの光は拒否する」グループの名前はマスクド・バンダリズムといった。現代の社会構造に疑問を抱き、それを破壊することを究極の目標としていた。自分たちはニュータイプだという自負を持っており、欲望を満たすために暴力行為を行う暴走族を旧タイプと呼んで馬鹿にしていた。そしてその旧タイプを排除していくことが、当面の彼等の仕事だった。まず自分たちの世代から変わらなければならぬというのが彼等の主張だった。

功一が加入してからの一年間で、マスクド・バンダリズムでは十六名の仲間が検挙されていた。しかしそれとほぼ同数の新メンバーが補填されていた。殆どの者が旧タイプからの転身組だった。

加入の動機は様々だったが、何となく格好よさそうだったからというのが最も多かった。従来の暴走行為に飽き飽きしていた連中は、見ようによっては禁欲的なところもあるニュータイプのやり方に、憧れのようなものを抱くのもしれなかった。もちろんもっと単純な理由を述べる者も少なくない。黒い制服が格好いいからという者も結構いた。

だが功一は、このところ何となく釈然としないものを感じるようになっていた。現代の社会構造を壊すために自然発生したというが、本当にそうなのだろうかと考え始めていた。今の自分たちも、やはり何らかの見えない力に制御されているような気がして仕方がなかった。

そんなふうと思うのは、ニュータイプが存在するのがこの地区だけではなく、同じような主義主張を持った闘争集団が、全国に誕生しつつあるからだだった。それぞれのグループ間に繋がりは無い。たまたまマस्कド・バンダリズムのようなものが、全く同じ時期に発生するというのが、どうにも解せなかった。リーダーにいわせると、時代が要求しているからだということになるのだが、本当にそうだろうか。もっとも何らかの意志によって自分たちのようなニュータイプが作られたのだとしても、それが何の役に立つのかということになると、功一にもうまく答えられなかった。

マस्कド・バンダリズムは新興住宅街を横切る幹線道路を走り続けていたが、やがて後方から一台二台と群れを離れていった。これがニュータイプの特徴の一つだった。集合も解散もなく、ある時刻になればどこからともなく集まり、またどこかへ消えていくのだ。

相馬功一も抜ける時がきた。彼はバイクの速度を徐々に緩めて後方に下がると、集団から抜けたただ一人脇道を左に曲がった。

その道は少し上り坂だった。有名不動産会社が分譲した、同じような外装の住宅がどこまでも

続いている。功一の家は道を上りきったところに建っていた。彼の父親が、人から見下ろされるのを嫌ったからだ。その父を彼は嫌っていた。

功一は家の前でバイクから降りると、すぐに家には入らず、眼下に広がる夜景を眺めた。薄闇の中に様々な形の光が点在しているようすは、美しいといえなくもなかった。

彼の目が一つの光を捉えた。彼は目を凝らし、次に服の胸ポケットに入れてあった小型望遠鏡を取り出した。またあの光だ、と心の中で呟いた。

その光を見つけたのは先週のことだった。街灯やネオンサイン、家の窓明かりなどに混じって、一つだけ異質な光があった。といっても特に強い光ではない。ただそれをじっと見ていると、光り方は一定ではなく、色や点滅のパターンがどんどん変化しているようなのだ。

功一は望遠鏡を使ってそれを見た。光はどこかの建物の上から放たれていた。そのうちに光が奇妙な点滅を始めた。それをしばらく見つめた後、功一は望遠鏡から目を離れた。

(こっちへ来いよ)

光がそう囁きかけてきたように思えたからだった。

まさか。功一は望遠鏡を畳んでポケットにしまい、一人苦笑した。どうせ新型のネオンか何かだろう、気にするほどのことじゃない。彼はバイクをガレージに入れようとした。だがその前にもう一度振り返った。

光は同じ位置にあった。そして先程と同じように囁いてくるのが、今度は望遠鏡なしでもよくわかった。こっちへ来いよ。こっちへ来いよ。

功一はバイクに跨がると、再びエンジンをかけた。

志野^{しのまさし}政史がその光に気づいたのは、数学の難問をどうにかこうにか克服した直後のことだった。その日もいつも通り、夜遅くまで勉強していたのだった。

彼はまだ高校二年だった。しかし自分ではすでに受験生だという意識を持っていた。大学を受験する意思があり、そのための勉強をしているのだから、そう考えるのが当然だと思っていた。またそれは一人息子に多大な期待を寄せる、彼の両親の思いでもあった。受験まであと一年と九か月。彼や彼の両親は、もうあまり時間はないと考えていた。

優秀な医師になり、父親の病院を継ぐことが、政史の子供の頃からの夢だった。いやじつはそれは彼の夢ではなく、両親の夢なのだったが、彼自身はそのことに未だに気づいていなかった。息子が彼独自の夢を持つことを両親は恐れた。だからその前に彼等は彼の意識に、自分たちの希望するものを植え付けたのだった。

しかし政史は現在の状況に格別不満を抱いているわけではなかった。両親が用意した長く急な階段を一段一段上がっていくことだけが、彼の当面の生きがいだった。それはそれで快適であり、うまくことが運んだ時には充実感と達成感を得ることができた。自分で何かを決めなくていいという気楽さが、その快感を支えているのは明らかだった。彼は時折現在の位置から後ろを振り返り、上ってきた階段の長さにうっとりした。

ただこのところ彼はスランプ^{おちい}に陥っていた。集中力が長続きせず、成績も伸び悩んでいた。たった今解いた数学の問題にしても、本来ならもっと楽に正解^{たつ}に辿りつけたはずだと思った。問題に没頭していないから、うまく頭が働かなかったのだ。

政史はこめかみを押さえた。気持ちがいらいらしていた。

原因はわかっていて。清瀬^{きよせ}由香^{ゆか}のことが頭から離れないのだ。彼は机の引き出しを開け、二年

に上がった時に撮影したクラス写真を取り出した。男子が二十人に女子が十八人のクラスだ。三列に並んだ女子の、ほぼ中程に清瀬由香がいる。

やや栗色がかった長い髪をごく自然に肩まで垂らし、写真に撮られる時の癖なのか、卵型の顔をほんの少し右に傾けていた。くつきりとした目は、写真の中から政史を見つめてくるようだった。

彼女は現在教室では、政史の斜め前に座っている。彼が黒板を見ようとすれば、必ずその姿が視界に入ってしまうという位置だった。そのため彼はこのところしばしば、教師が黒板に書いたものをノートに写し忘れていた。授業中ずっと、清瀬由香のうなじのあたりを見つめていたこともあった。

彼の母親は、息子が女子学生に興味を持つことを殊の外警戒している。それが学力の低下に直結すると信じているからだ。今年の正月にクラスの女の子から年賀状が来た時には、彼女は顔色を変えて詰問した。まあこの子は誰なの。どうしてあなたに年賀状をくれるの。学校で親しくしているの。その女の子がクラスメイト全員に年賀状を出したということが判明するまで、母親はその年賀状を冷蔵庫のドアにマグネットで留めておいたのだった。

母親にいわれるまでもなく、今は女の子に心を奪われている場合ではないと政史も思っている。こんなことではいけない、早く忘れなければ。雑念を払って、勉強に集中しなくては。だがいくら気持ちを抑えようとしても、清瀬由香の顔が心に浮かんでくるのをどうすることもできなかった。特に最近には性に関する好奇心が強くなり始めており、それが清瀬由香に対する気持ちと相乗効果をもたらすため、肉体的欲求のほうを鎮めるのも大変だった。彼は由香のことを考えながら、しばしばオナニーした。そしてその頻度は少しずつ増える傾向にあり、それによる自己嫌

悪が、さらに彼の心を追い詰めつつあった。今も彼は写真を引き出しに戻した後、自分の右手が股間に伸びていることに気づき、激しい罪悪感に襲われた。今日彼はすでにオナニーをしていた。

彼は立ち上がり、窓を開けた。もう五月だが、夜の風は冷たい。その風に当たれば、ぼうっとした頭も冴えてくるかもしれないと思った。

光を見たのはその時だった。向かいの家と家の間から、不思議な光が発せられていた。それを見た瞬間、なぜか政史は心臓がびくんと一跳ねするのを感じた。彼は目を凝らした。光は思ったよりも遠くから送られてくるようだった。

何の光だろうと思った。色は絶え間なく変化しており、点滅のパターンも一定ではなかった。まるでこちらに語りかけてくるみたいだと政史は思った。

彼は窓際に立ったまま、その光を眺め続けていた。光が消えると彼は時計を見た。午前三時ちょうどだった。三十分以上が経過していた。

窓を閉め、机に向き直った。不思議な爽快感があった。勉強に没頭できそうな気がしていた。実際この後彼は五時まで、一度も休止することなく英文解釈に取り組めた。これほど気持ちを集中させられたのは久しぶりのことだった。

翌日の夜、彼は窓のカーテンを開けたまま机に向かっていった。勉強の手を休めるたびに外へ目をやる。今夜もあの光を見られるのではないかと期待してのことだった。

そして光は現れた。午前二時ちょうどだった。昨日と同じ位置から、同じような明滅を繰り返しながら光は送られてきた。政史は窓際に椅子を移動させ、一時間たつぷりと光を觀賞した。その後は昨日と同様、気分がすっきりし、身体の内側から氣力が漲みなぎってくるのを感じた。

それから毎日午前二時から三時まで、謎の光を見つめるのが彼の日課になった。このことは両親にも話さなかった。悪いことをしているという意識はなかったが、人に話してはいけないことのように思えたのだった。両親は何も怪しんではないようだった。むしろ二人が、「最近、あの子の目の色が違ってきたわ。ようやく自覚が出てきたみたい」、「そりゃあそうだろう、受験まであと二年もないんだからな」と話しているのを、政史は耳にした。事実彼は自分の内面に微妙な変化が生じているのを自覚していた。いくつかの悩みが、あの光を見るようになってから、大したことはないと思えるようになった。積極性が出てきたような気もした。光を見るようになってから十日後、彼はついに清瀬由香に話しかけた。他愛のない会話だったが、彼は数学のどんな難しい問題を解いた後よりも強い充足感を得ていた。

あの光には人間の内面を変える力があるのかもしれない。漠然とながらも、彼はそんなふうに思うようになった。

当然のことながら彼の関心は、光を発している者の正体へと向けられていった。誰が何のためにしていることなのか。なぜあの光には、こんな不思議な力があるのだろうか。

ついにある晩、政史は自分の疑問を解決すべく行動に出た。それだけの行動力を誘発したのもまた、あの光の力かもしれない。

午前二時になるのを待ちかねて、小塚輝美はそつとベランダに出た。父親の双眼鏡を目に当てる。だが時刻が早過ぎるらしく、彼女の求めるものは見つからなかった。

「正確なんだ」輝美は思わず呟いた。今夜で四晩目になるが、あの光は午前二時ちょうどにならないと見えないのだ。

光を見つけたのは偶然だった。あの夜、彼女は死ぬつもりでリビングルームからこつそりとベランダに出たのだった。ここは五階で、下はアスファルトの上に線を引いただけの駐車場だ。飛び降りれば、たぶん苦痛を感じることもなく死ぬだろうと思った。

その日の夕方、母親と祖母が大喧嘩をした。原因そのものは些細な（さいさい）ことだった。二人の冷戦状態が限界に達しており、双方とも怒りを爆発させる機会を窺（うかが）っていたに違いなかった。

親戚のおばさんによれば、二人の不仲は現在中学一年の輝美が生まれる前からのことだったらしい。当時小塚家は祖父の代からの家に住んでいて、輝美の母親は嫁いできた時から舅（しゅうと）や姑（きょうと）と同じにしていたことになる。輝美の祖母はどんなことでも昔からの慣習通りでないと気が済まないという人物で、合理的な方法を好む母と何かにつけて衝突した。

やがて輝美の父がこのマンションを購入し、親子三人だけの生活が始まったが、平和な時期もそう長くは続かなかった。祖父が死去し、輝美の父が祖母を引き取らざるをえなくなったのだ。当然輝美の母は反対したが、父が強引に話を進めてしまった。輝美には詳しいことはわからないが、祖父の家を売却した金でマンションのローンを返済できるというチャンスで、父は逃したくなかったようだ。

祖母が来た時、輝美は四年生だった。年代ものの荷物が次々に運びこまれるのを、ドアの陰から般若（はんにや）の顔で睨（にら）んでいた母を、しっかりと記憶している。母は独り言をいつていた。こんな狭い家なのにお婆さんが。3LDKでどうやって。長生きするわよ、きつと。おおいやだ、今夜のおかずから頭が痛い。パパがいけないのよ。働きに出ようか。でもきつと何かいわれる。早く死んでくれないかしら。

輝美は表へ出ると小さな手を合わせ、太陽に向かって祈った。どうかママとお婆あちゃんが喧

嘩しませんように。仲良く暮らしていけますように。

しかし幼い彼女のこの願いはかなえられなかった。引越してきたその夜に祖母が夕食の味付けに文句をつけ、それがきっかけで激しい口論となったのだ。祖母は激しい音をたてて立ち上がり、その日から自分のものになった部屋に引き上げた。その勢いでテーブルから落ちた茶碗がぱっくりと割れ、中の米飯がこぼれ出た。その光景は自分たちの姿を暗示しているようで、輝美の網膜に暗い過去として焼き付けられた。その間父はじっと下を向き、黙々と食事をとっていた。

それ以来母と祖母は、同じ家に住んでいながらお互いの存在を無視しながら生活してきた。二人が言葉を交わすことは皆無で、何らかの意思疎通が必要な場合は、父が輝美が仲介をしなければならなかった。本人たちがそこに揃っているのに、通訳のようなことをさせられたこともあった。

「二人ともいい加減にしてよお」何度そういって泣いたかしかない。そのたびに二人は一瞬気まぐずそうにするものの、どちらかが譲歩するということはなかった。父にはもはやこの状況を何とかしようという気はないらしく、家庭内に漂う険悪な空気から逃れるように、会社からの帰宅時刻がどんどん遅くなっていった。

そして先日、ついに爆弾に火がついたのだった。輝美は今まで大人の男同士の喧嘩さえ見たことがなかったもので、目の前で母と祖母が掴み合いを始めた時には悪夢を見ているのかと思った。二人の形相は、とても自分の家族のものとは思えなかった。

その夜母は家を飛び出し、祖母は自室にこもると何かに憑かれたように経を唱え続けた。遅くに帰ってきた父は日用雑貨品が散乱した室内を一目見て事態を察知したようだが、特に何らかの解決策を講じることもなく、ダイニングテーブルにウイスキーの壺とグラスを置くと、するめを

かじりながらちびちびと飲んでいたのだった。

輝美はベッドに入ってから、全く眠れそうになかった。涙がいつまでも止まらなかった。もう死にたい。不意にそんな思いがこみあげてきた。それはいい考えであるように思えた。自分が死んだなら、皆が反省してくれるかもしれない。

そうしてふらふらと輝美はベランダに出たのだった。死は怖くなかった。自分の死が新聞に報道されることまで彼女は想像した。家庭内の不和を苦にして自殺。そういう見出しが出ればいいと思った。

彼女の視界の端で何かが光ったのは、ベランダの手摺りに手をかけた時だった。彼女はそちらに顔を向けた。光がまた点滅した。ぴか、ぴか、ぴかり、という感じだった。

優しく、不思議なリズムだった。その遠くからの光は、自分だけのために瞬^{また}いているように見えた。ぴか、ぴか、ぴかり。元氣を出しなよ。負けちゃいけない。

それを見ているうちに、輝美は自分の気持ちが落ち着いてくるのを感じた。萎^なえそうになっていた氣力が、また盛り返してくるのがわかる。死ぬのなんてつまらない。そう思えるようになるまでだった。

それから二日続けて、彼女は光の呼び掛けを聞いた。だが遠すぎて、微妙な変化がわからない。そこで今夜は双眼鏡を用意したのだった。

午前二時になると、いつものように光の眩きが始まった。輝美は双眼鏡の焦点を合わせて、その光を見つめた。肉眼では気づかなかった無数の色の組み合わせ、細かく複雑な点滅のパターンなどが、よくわかった。

そのうちに彼女は、光がこう語りかけてくるのを感じていた。

(こっちへおいでよ。さあ、早く)

「来月からは木曜日にしよう」

木津玲子がストッキングを穿いていると、ベッドの中から男が声をかけてきた。

玲子は振り返った。「金曜は都合が悪いの?」

「ああ、いろいろとな」

「『先生』の都合が悪いんだ」

「余計なことをいうな」男は腕を伸ばし、枕元に置いてある鞆かばんを取った。中から封筒を取り出すと、玲子の尻の横に投げた。「今月分だ」

「ありがとう」

玲子はそれを手に取る。そこその厚みが指先に伝わってきた。悪くないバイトだと思っていた。しかも並みの学生では、まず入れないような店で夕食ができる。

男のことを玲子は殆ど何も知らなかった。わかっているのは、若い娘を愛人にする程度の金を持っているということだけだ。アイツと名乗っているが、それが本名だとも思えなかった。時々ホテルからどこかへ電話をかけるが、その時に「先生」という言葉を使うのを何度か耳にしていた。無論玲子は「先生」について彼に尋ねたことなどない。

「じゃ、あたしはこれで」

身繕いを終えてから男のほうを向き、玲子はいった。

うむ、と男は頷いた。

彼女はスイートルームのドアを開け、廊下に出た。ドアが閉まる直前、男が受話器を取り上げ